

散佚物語『玉藻に遊ぶ権大納言』の復原

——六条斎院物語合考断章——

神野藤昭夫

一 後堀河院の御時の物語絵と『玉藻に遊ぶ』の評価

後堀河院の御時の物語絵と『玉藻に遊ぶ』 天福元(一二三二)年(正確には改元以前の貞永二年)の春、後堀河院(一二二二〜三四)は、中宮であつた藻壁門院尊子(一二〇九〜三三)と、時の内大臣西園寺実氏の冷泉富小路にあつた常盤井殿とよばれた邸におもむき、「絵づくの貝おほひ」を催した。絵を賭け物にした貝合と解するのが通説である。後堀河院は、前年の十月四日、中宮尊子との間に生まれたわずか二歳の四条天皇に位を譲つたばかりのことである。

この「貝おほひ」のことは、『古今著聞集』巻第十一「画図」の後堀河院の御時、絵づくの貝おほひの事」に詳しい。

この貝合では、まず女院方が負けて、唐櫃に入った『源氏絵』

十巻が出された。ところが、女院が嫉妬したためか、次には院の方が負けて、唐櫃二合で入った「小衣」(狭衣)の絵八巻、それに種々の物語を四季ごとの場面に書き分け、一月を一巻として十二巻に仕立てたもの、さらにそのほかの雑絵二十余巻などが供されたという。

じつは、これらの賭け物は、いずれもあらたに作られたものであつた。その間の事情は、『明月記』や『真經寺文書』によつて知られる。^(註)

特に種々の物語の代表的場面を月別に選びだす作業は、藤原定家の手になるものであつた。

この年の三月十八日、定家は息子の為家と、まだ選出を終えていない月の分を物語のどこの場面にするか、徹夜で相談している。「物語の絵、月次の事評定す。闕月今且求め出すの間、曉鐘に及ぶも寝ねず。」とある。さらに二十日の条によれば、月別

に五場面、従つて総計六十場面が、十の物語の中から選ばれたことを知ることができる。中宮方で用意した『源氏』と院方で用意した『狭衣』を別として、両者以外の物語ベストテンの中から、月別場面が選び出されたのである。平均すれば、各物語六場面となる。この間の事情とそれらの物語名を掲出すれば、次のとおりである。

日来撰出物語月次、十二月各五所、不入源氏并狭衣、於歌者抜群、他事雖不可能然、源氏当時中宮被新図、狭衣又院御方別被書、此所撰、夜寝覚、御津浜松、心高東宮宣旨、左右袖湿、朝倉、御河爾開留、取替波也、末葉露、海人苧藻、玉藻爾遊、以十物語撰毎月五、金吾清書訖、又加一見返之、付繁茂進入云々。

ところで、これらの物語は、定家が三十五年以上も前に『物語二百番歌合』を編集した際、抄出対象とした物語と九つまで重なっている点が注目される。物語中の秀歌抄出と物語絵にふさわしい場面抄出という目的の違いはあるが、対象とする物語については、『露の宿り』に換えて『玉藻に遊ぶ』が選ばれている点が異なるだけである。ここには『玉藻に遊ぶ』を入れようとする積極的な評価が働いていたと推察される。

ところで、この「絵づくの貝おほひ」の催された年の九月十八日、藻壁門院は皇子を早産し、母子ともに命を落とすことになる。翌文暦八（一二三三）年八月六日には、後堀河院もまた二十三歳の若さで世を去っている。「絵づくの貝おほひ」は後堀

河院と藻壁門院の短い生涯を印象づける最後の輝きともいうべきみやびであった。『古今著聞集』によれば、このとき賭けものとされた絵は、「貝おほひ」のち、姫宮（暉子内親王）に贈られたという。だが、その姫宮も夭折、四条院にさらにその崩後には、藻壁門院の妹である四条院の尚侍全子の手に渡つたと伝えられる。この物語絵と同時に抄出された『雑絵』のうちの蜻蛉日記絵の詞書断簡こそ、現存する玉津切ではないか、と想定するのが田村悦子氏の推論であった。

『玉藻に遊ぶ』の評価、さて、この『玉藻に遊ぶ』は、天喜三年（二〇五）五月三日庚申の夜、六条斎院祿子内親王家で開催された「題物語」の歌合の席上、宣旨によつて提出されたものであった。当夜、提出された物語十八編の物語のうち、この「後堀河院の御時の物語絵」の抄出対象に選ばれた物語、すなわち定家撰物語ベストテンともいうべき枠の中に入ったのは『玉藻に遊ぶ』一編にとどまる。

また『無名草子』において、『玉藻に遊ぶ』は、『狭衣』『寝覚』『みつの浜松』について、『古本』とりかへばや』に先立つて論評の対象とされており、評価の浅からぬことがうかがわれる。物語合十八編のうち『無名草子』で論評の対象とされたのも、同じくこの『玉藻に遊ぶ』一編にとどまるのである。

さらに下つて文永八年（一二七一）に成つた『風葉集』では、物語合十八編のうちの七編、『玉藻に遊ぶ』・『まよふ琴の音』（浦風に紛ふ琴の声』に同じか）・『岩垣沼』・『あらば逢ふよ』・

『霞隔つる』・『小倉山たづねる』(をかの山たづねる)に同じか)・『逢坂越えぬ』から物語歌が採録されているから、『玉藻に遊ぶ』だけが伝存していたというわけではない。

これら乏しい情報の範囲内ではあるが、『玉藻に遊ぶ』という物語は、平安末から鎌倉初頭にかけての時代、かなり高い評価を与えられていたこと、少なくとも物語合十八編のなかでは、後代の評価のもっとも高い物語であったことが知られるのである。

『玉藻に遊ぶ』の復原資料では、いつたい『玉藻に遊ぶ権大納言』とは、どのような物語であったか。

この『玉藻に遊ぶ権大納言』の物語内容を知る手がかりとなる復原資料は、現在のところ、(1)物語合歌、(2)『無名草子』記事、(3)『風葉集』歌十三首にほぼ尽きる。これをどう解説し、再構成して、その物語内容を復原するかというところに課題がある。既にこの復原に関する研究には、松尾聡・樋口芳麻呂氏をはじめ、諸氏に関連する論考がある^(注5)。

本稿では、私なりにこの物語の復原を試みてみたいと思う。論述の都合上、先学の諸論考と重複せざるをえないところのあることをお断りしておく。

二 『玉藻に遊ぶ権大納言』の題号と物語合歌をめぐって

『玉藻に遊ぶ』の題号 さて、天喜三年五月三日庚申の夜、一番

左方の女別当の『霞へだつる中務の宮』の番として、右方から提出されたのが、宣旨の手になる『玉藻に遊ぶ権大納言』であった。

【資料A】

右 たまもにあそぶ権大納言

せじ

二 ありあけの月まつきとはありやとてうきうき^マきてもそらいいでにけるかな

この物語の主題は、題名がかなり雄弁にものがたっている。

この物語の主人公は権大納言であつて、その主人公のありかたが『玉藻に遊ぶ』という和歌引用によつて表現されていることになる。すなわち、

春の池の玉もに遊ぶにほどりのあしのいとなきこひもするかな(『後撰集』巻第二・春中・七二/題しらず・宮道

高風)

という和歌を引いている^(注6)。『玉藻に遊ぶ』という題号は、春のどのかな池の美しい藻の間を優雅に泳ぎまわる鴉鳥すなわち「かいつぶり」の美的なイメージを想起させるが、右の「春の池の」の下旬をプレテキストとしてふまえることによつて、傍目からは見えない水面下で、忙しく足を動かしているさまを比喻として、華やかさとは対照的な「いとなきこひ」すなわち苦しみつづける恋、あるいは次から次へと苦しみをあじわう恋を表現していると解説することができる。いずれにせよ、華やかな外貌と、内面の苦悩との対比が『玉藻に遊ぶ』という題号には託

されているといえよう。

物語合歌は発端部のものか 物語合歌は、「有明の月の出を待っている女の家があるだろうかと思つて、こころもうわの空に家を出てきてしまったことだ。」の意。月に誘われて、忍び歩きに出てきた男のつぶやきとみてよい歌である。

ところで、『貝合』の冒頭は、次のようなものであつた。

長月の有明の月にさそはれて、藏人少将、指貫つきぎしく引きあげて、ただ一人、小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ち隠しつべく、ひまなげなるに、「をかしからむところの、あきたらむもがな」と言ひて歩み行くに、木立をかき家に、琴の声ほのかに聞ゆるに、いみじううれしくなりて、めぐる。

『貝合』の主人公藏人の少将が、長月九月の有明の月に誘われ、朝霧にまぎれて、かいまみを願うところから、この物語は始まっているのであつた。「長月の有明の月にさそはれて」は、索性法師の

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな（『古今集』巻第十三・恋歌四・六九一）

が響いているとみて誤らないところ。この歌は、もともと屏風歌であつたと考えられるが、女が長月九月の長夜、男の訪れを有明の月の出るまで待ちうけていたと解されるものであつて、『貝合』の「長月の有明の月にさそはれて」にも、男の訪れを待つ女の幻想が秘められていてと想定される。

物語合歌の「ありあけの月まつさと」にも、このような幻想性が読みとれるはずであり、『貝合』の場合と同巧とみられる。右の物語合歌は、『玉藻に遊ぶ権大納言』の冒頭部近くにあつた歌とみてよいのではないか。少なくとも、男を忍び歩きに誘いだすところの場面に出てくる歌であつて、恋の発端部に位置するものであつた蓋然性が高い。

物語冒頭とその特質 ところで、この物語の冒頭は、たいへん印象的なものであつたらしい。

【資料B①】

また、『玉藻』はいかに」と言ふなれば、「さして、あはれなることもなければ、親はありくとさいなめど」とうちはじめたるほど、何となくいみじげにて、奥の高き。

この物語は、「親はありくとさいなめど」という斬新な書き出しをもつており、それがなにとはなしに、これから始まる物語への期待感を盛り上げてくれるという。物語の伝統的な書き出しは、時と主人公の出自を語ることから始まるのが常套であるから、催馬楽の引用から始まるのは、確かに个性的で斬新である。

しかし、同じ物語合の席上提出された『逢坂越えぬ権中納言』も「五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう」云々と書き出されており、『古今集』の恋歌の「五月待つ花橘の香をかげば昔のひとの袖の香ぞする」をふまえて、誰ともわからない男の心理を印象的に描きだすところから始まっている。とすれば、

このような冒頭表現の技巧じたいは、『玉藻に遊ぶ』のオリジナリティとして声高に評価するというわけにはゆかなくなる。おそらくこのような物語冒頭の由来は、『源氏物語』などの巻々の冒頭が、単独の物語の冒頭表現へと転化されてきたところに生まれてきたものであつて、そうした物語の冒頭表現の新たな工夫が、この物語合提出作などで同時多発的に出てきている状況を認識すべきなのであろうと思う。

「少年の春は」と始まる『狭衣物語』の冒頭もまた同巧であつて、和歌あるいは歌謡ではなく、漢詩引用から始めたところに工夫があるといえる。ただし『狭衣』の冒頭表現の場合、「時は惜しんでもとどまるものではなく、たちまちに三月になつた」ということをいうための表現であつて、その意味ではきわめて装飾的であつて、白楽天引用がただちに物語の主題にかかわつてゆくとはいえない。

『逢坂越えぬ権中納言』の場合には、五月の到来が、古歌を媒介に男のそぞろに発動する女への情念を表現しており、『狭衣』の場合のように装飾的という評にとどまらない。

『玉藻に遊ぶ』の場合、

いかにせむ せむや 愛しの鴨鳥や 出でて行かば 親
は歩くときいなど 夜妻は定めつや さきむだちや

という催馬楽「何為」をふまえて、「親はほつき歩くとき責めるけれども、私はまだ隠し妻すらもつていないのですよ。」の意を響かせている。これも『狭衣物語』の場合のような装飾的冒頭

ではなく、『逢坂越えぬ権中納言』の場合のように、物語内容との関連をみるのが妥当である。とすれば、物語がまだ思い妻をもたぬ主人公の彷徨から始まっていることを示唆することになる。さらにここには「妨げる親の存在」も重要なフアクターとして読み取ることができる。

このような物語冒頭は、資料Aの物語合歌の男主人公の女主人公との出会い場面へと繋がつていたと想定するのは、不自然ではないのではないか。

すなわち若い男君の、さすらいと恋の出会い、親の制肘によるままにならない状況。主人公権中納言の「玉藻に遊ぶ」恋はこのように始まつていたとみることができるといえる。

『玉藻に遊ぶ権中納言』短編説 さて、『玉藻に遊ぶ』は、短編として提出されたという説がある。特に、樋口芳麻呂氏は、まだ権中納言の恋を描いた第一帖が提出されたので、その後、書きついで物語を完成したときには、『玉藻に遊ぶ権中納言』はふさわしくなく、『明月記』や『風葉集』が記すように『玉藻に遊ぶ』が正式の書名となつたのか、そう呼称されるようになったのだからというより踏み込んだ仮説を述べる。

じつさい当夜の物語のうち、現に『逢坂越えぬ権中納言』は短編であるし、『岩垣沼』の提出が遅れそうになつたも、物語合に間に合わせるべく、用意されたものと見られるので、中には好評に気をよくして続編が書かれるということもあつたかもしれない。だが、『玉藻に遊ぶ』は、その暗示される主題からすれ

ば、一卷で完結する以上の内容を内包していたことも確かである。〈玉藻に遊ぶ〉という題号が特定の女性との「心の休まるひまのない恋」が、複数の女性たちとの「心の休まるひまのない恋」へと発展したともいうのならとにかく、題号それじたいからすれば、ある程度の中・長編的構想が想定されるから、短編として提出されたものが、長編へと発展したというふうには捉えない方がよいだろう。

『風葉集』では、『まよふ琴の音』（↑浦風に紛ふ琴の声）と同じか）、『岩垣沼』（↑岩垣沼の中將）、『あらば逢ふよ』（↑あらば逢ふよの嘆く民部卿）、『霞隔つる』（↑霞へだつる中務宮）、『小倉山たづねる』（↑をかの山たづねる民部卿）と同じか）、『逢坂越えぬ』（↑逢坂越えぬ権中納言）と略称（括弧内は物語台における物語名）されている。したがって『玉藻に遊ぶ権大納言』だけが物語の完成によって『玉藻に遊ぶ』の正式名称と変更されたとはいえない面がある。

しかし、この物語の完成の晩に、主人公の栄達によって『玉藻に遊ぶ権大納言』という題号がふさわしくなくなつたということはいえることであつて、その結果『玉藻に遊ぶ』と呼ばれるにいたつたというのは説明として首肯される一面も確かにある。

本稿では、物語合の題号にもとづき『玉藻に遊ぶ権大納言』とするが、このような経緯を踏まえ適宜『玉藻に遊ぶ』の呼称を用いることとする。

三 権中納言と蓬の宮の恋

男主人公と蓬の宮との出会い 『風葉集』所載の『玉藻に遊ぶ』十三首のうち、閑白歌は七首。そのうち贈答の相手の人名を具体的に知りうるものは、①内侍督（九三六 一〇二二）、②冷泉院の一品宮（六六九）、③一条院の女一のみこ（八〇九）。さらに『無名草子』を視野に入れるならば、④春宮の母女御（二〇二二）の四人。そのほかに④「人」（三四二）、⑤「女」（九〇九）、⑥「女」（九六四）がある。

『玉藻に遊ぶ権大納言』の権大納言は、最後には閑白となる、この物語の男主人公であることは動かない。また『無名草子』によれば、『蓬の宮』とよばれ、後に尚侍となる女性が女主人公と目すべき存在であり、物語の発端における恋の相手こそこのひとであろう。まずこの二人の関係を軸に、この物語の輪郭を考えてみることにし、尚侍との関係を示す資料を順次検討する。

【資料C①】

内侍督みそめて侍りけるあしたにつかはしける

玉もにあそぶ閑白

九三六 こえて後しづ心なきあふ坂を中中せきのこなたなり

せば

男君（後の閑白をこう呼称しておく）の女君への後朝の文である。「あなたとようやくお逢いすることができましたが、心休まらぬ思いです。かえつてお逢いしないほうがこんな思いをし

なくてすんだのに」との意。二人の契りをいつの時点とみるかという問題があるが、物語のはじめ、女君が尚侍として入内する以前のことであろう。

妻を定めぬ権大納言時代の男君は、親の心配をよそに、月に誘われて、彷徨する。そこでその存在を知り、曲折ののち、逢うこととなったのが、この女君なのであった。「かえってお逢いしないほうがよかったのに」という嘆きは、「かなり交渉の過程を経たのちの契り」（松尾聡）とみる立場もあるが、親の干渉といった思うにまかせぬ状況を読みとっておくことにしたい。

蓬の宮の運命① その二人の出会いはそののちどうなつてゆくか。女君の運命をあらためてたどつておけば、次のようである。

【資料B②】

物語にとりては、蓬の宮こそいとあはれなる人。後に尚侍なむのうけになりて、もとの大臣に出だしたてられたる、ひろめき出でたるほどこそいと憎けれ。

女君は「蓬の宮」と呼ばれる存在であった。「宮」とあるように王統腹の姫君だが、「蓬の」とある形容は、頼るべき庇護者をうしない零落した邸に暮らしていたことよると思われる。

資料B②は、解釈のむずかしいところ。いま諸説をあげれば、次のようである。

(a) 富倉徳次郎（無名草子評解）有精堂 昭29・9初版 は、「もとの大殿によつて宮仕に出るようになされたあたり、又無遠慮にふるまつているあたりは、ひどくにくにくいのです。」と

口訳する。

(b) 松尾聡（平安時代物語の研究）東寶書房 昭30・6 は、要点を摘記すると、「ひろめき」については、「尚侍になつてはじめて「ひろめきいでた」と評せられるところをみると、宮とは申しながら、その生ひ立ちはかなり不遇な生活をして居られたのであらう」とし、「もとの大殿」については、「主人公と対立する勢力であるかも知れない。恐らくは、伯父またはそのたぐひの人で、孤独の女主人公に対して親権を持つ男であらう」とする。

(c) 鈴木弘道（校註無名草子）笠間書院 昭45・4 は「出だしたてられたる」の箇所「宮仕えに」と、「ひろめき出でたる」の箇所「ふらふらと動きまわる」と注をほどこしている。
(d) 山岸徳平（角川文庫「無名草子」角川書店 昭48・11）は、「もとの大殿によつて宮仕えに出るようになされたあたり、また無遠慮にふるまつているあたりは、たいそうにくらしいことです。」と現代語訳する。

(e) 桑原博史（新潮日本古典集成「無名草子」昭51・12）は、「もとの大殿」に「蓬の宮」に対し親権を持つていた人であらう。「もとの」は、前官の意か、以前世話になつていた意か、両説がある。」と頭注する。また「（もとの大殿の）手て出仕させられた時に」「無遠慮にふるまつているのは」と傍訳をほどこしている。

(f) 久保木哲夫（訳註日本の古典「堤中納言物語・無名草子」小学館 昭

621)は「もとの大臣の世話で出仕させられたのと、ふらふらとさまよい出たのはたいそう憎らしく思われますけれども」と訳し、「不明。以前に関係のあつたか、または、前の、大臣。主人公(権大納言、のちに関白)のことか。」「出仕の際に世話を受けたか。」「ふらふらとさまよい出る」と注する。

第一に、この文章の構造の把握は、どう把握できるか。

ここは、「蓬の宮」が、のちに「尚侍」となり、

(1)「もとのおとど」に「出だしたてられたること」によつて

「ひろめき出でたるほど」が「心憎し」と評されている。

(2)「もとのおとど」に「出だしたてられたること」と「ひろめき出でたるほど」が「心憎し」と評されている。

の二様の解がありうる。(a)から(e)まで(1)の立場で解釈されており、通説といえようか。これに対して、(2)は(f)の久保木説にとどまるが、私見では、後に述べるように(2)の立場でここを捉えてみたいと思う。

第二に、「もとのおとど」とは、具体的には誰をさすか。これには、

(1)伯父またはそのたぐいの人 (b)・(e)

(2)主人公(権大納言、のちに関白) (f)

の二様の解があるが、ここでは、さらに

(3)権大納言の父

という可能性を考えてみたい。

(1)でいえば、どのような事情でか、主人公とは対立する伯父のような人の手によつて、はればれしく宮仕えをすることになる。

(2)でいえば、どのような事情でか、契りを交わした当の相手である主人公権大納言、この段階では大臣となつていたひとが彼女の世話をし、その庇護のもとに宮仕えをしたことになる。

(3)でいえば、これまたどのような事情でか、契りを交わしたところの権大納言の父大臣の手によつて、宮仕えすることになったということになる。

そのようなありかたを「憎けれ」すなわち気に入らない、腹立たしいと評しているのである。だが、(2)主人公の世話をうけるの出仕とする想定は、権大納言と女君との関係を考慮するとき、いかにも妥当性を欠く。

いったい「もとのおとど」とは「大殿」に対して「もとの大殿」ということではあるまいか。親の干渉あるいは妨害の文脈に即して考えるならば、(3)のように、ここは男君の父親がふたりの仲を割くように女君を世話して、入内させるといふ展開であつたのではあるまいか。もとより、それが父親の意向をうけたものとすれば、(1)の伯父のしわざである可能性もありはするが。

このような父親の介入による、恋の蹉跎の先例には、『うつほ物語』における若小君(兼雅)と俊蔭の女との出会いが思い出されるし、父親が女君を排除する行動に出るものには、いわゆ

るへしのびね型」物語群における物語展開の例がある。細部をどう埋めるかの問題はあれども、ここは、父親あるいはその意向うけた者の手によって女君が出仕することをが咎められているのだと理解したい。

第三に、その「尚侍」の「ひろめき出で」る行為が「憎し」と評されていることになるのだが、いったい「尚侍」のどのような行動が非難されているのか。

「ひろめき出づ」について、あらためて諸注をみるに、(1)富倉注は「ひろめく」は「ひろがる」意で無遠慮で広く座をとる意。」と語釈し、山岸・桑原注はこれを踏襲する。

(2)鈴木注では「ふらふらする」意ととり、久保木注は「ふらふら」とさまよい出る」とする。

要するに、ここでも二様の解があることを知るが、古辞書類を検索すると、「ひろめく」「ひらめく」には、二系統の字があらわれていることがわかる。

『類聚名義抄』^(注13)では、

(1) 咲・咲・燭・鑿・燧・電

などのような漢字群をヒラメクあるいはヒロメクと訓んでいる。火・雷・金属などがやきを意味していることがわかる。また

(2) 飄・飄・飄・颺・颺・颺・颺

のような漢字群もヒラメクあるいはヒロメクと訓んでいる。こちらは風によって舞い上がるようなようすを意味すると考えら

れる。

『新撰字鏡』^(注14)には「幢」に「ヒロメクハタ」の訓がみえるが、これは(2)群に入る例。『温古知新書』^(注15)には「轟」にヒロメクの訓があるが、鼻息あらく怒る意で、やはり(2)群に入るといつてよい。

実際の用例をあげれば、たとえば「其の雷^{かみひかり}叱^{ひきま}きて、目^{まなこ}精^{せい}赫^か赫^か」(『日本書紀』雄略七年七月の条)は、少子部^{ちいさこべ}蜷^{なま}麻^まがとらえた大蛇のさま。雷のように光って音を鳴り響かせたという(1)群の用例。これに対して、『枕草子』(二八段「にくきもの」)に「老いばみたるもの(略)こなたかなたあふぎ散らして、塵掃きすて、るもさだまらずひろめきて」とか『和泉式部日記』の「頭証にて出でひろめかばこそはあらめ」は、落ちつかずふらついでとかふらふらしてまわる意で(2)群の用例となる。

「ひろめき出づ」を「無遠慮にふるまう」と訳す通説は、(1)群の「ひろめく」を脚光をあびる意ととり、それをさらに意識すればそう解釈できなくもないが、解釈上難があるといわざるをえない。これに対し、鈴木説の「ふらふらする」は、(2)群の用例をふまえた語釈。ただし直訳の感をまぬかれないうが、ここは(2)群に拠って解釈すべきであると判断される。これを文脈にうえて把握しようとしたのが久保木説の「ふらふらとさまよい出る」の訳であろう。

だが、「ふらふらとさまよい出る」とはどういうことか。これをさらに踏み込んで把握を試みれば、資料C③を先取りするこ

となるが、「出家」と関わるのではないか。尚侍は入内したものの、やがて宮中をさまよい出て出家するのである。

要するに、B②からは、蓬の宮が尚侍となって出仕する。それは「もとのおとど」すなわち男君（権大納言）の父大殿の後見というかたちをとるのだ。だが後に彼女は宮中をさまよい出て出家する。そういう情報を読み取ることができる。

蓬の宮の運命② 資料B②に続くのは、次の箇所である。

【資料B③】

またむねとめでたきものにしたる人の、はじめの身のありさま、もとだちこそ、ねぢげばみ、うたてけれ。何の数なるまじきみこしば、法の師などだに、いと口惜しき。物語にとりて、主^{あまの}としたる身のありさまは、いとうたてありかし。

第一に、B③の「むねとめでたきものにしたる人」とは誰か。結論をいえば、「蓬の宮」とみるのが穏当だろうと思う。なぜならば、他に存在知られる「冷泉院の一品宮」、「一条院の女一のみこ」ほかの人々がこの評にあてはまるとは思われないからである。鈴木・久保木注では、男主人公とも、蓬の宮とも解せるといふ立場をとっているが、男主人公の卑しい出自というものともみるのいかがか。語り手は、「蓬の宮」の「はじめの身のありさま（境遇）」の設定や「もとだち（素性・生い立ち）」を「ねぢげばみ（ひねくれているみたいで）、うたてけれ」と評しているのである。おそらく蓬の宮の没落と不幸な境遇の設定

がことさら誇張されていることが気にくわないとみたものと解する。

第二に、続く「何の数なるまじきみこしば、法の師などだに、いと口惜しき。」の箇所も、蓬の宮に関連する話題であったとみてよい。「何の数なるまじきみこしば、法の師」の登場も付随する不満として述べられているのであろう。

「みこしば」の箇所は、

(1)「この一文意味不明」（富倉、「人名であろう」（桑原）、「不明。人名であろう」（久保木）など不明とされてきたところ。

(2)松尾説では、ここに語脱を想定し、試みに「落ちぶれた境遇に生ひ『こしは、法の師などだにいと口惜しき』と解いている。

(3)山岸説では、「何の数なるまじき巫子、師は法の師などだに口をしき」と本文を立て、「物の数にもはいらぬ巫子や、師としては法の師などでさえも、まったく残念です」と解く。

(4)石川徹（日本古典全書『狭衣物語・上』解説 昭和40・7）は「みこしは」が「みちしは」の誤写（註「ち」は「こ」に誤写しやす）とすると、これは「道芝」であると考へてよいであらう。狭衣の飛鳥井の君の事を本文中に屢々「道芝の露」と称してゐる事、また仁和寺の威儀師を「法の師」と称してゐる事から見て、玉藻の方にすでに飛鳥井の君や威儀師のやうな人物が登場してゐたことが判り、玉藻の或部

分が狭衣の飛鳥井の君一件の粉本をなしてゐたらしいといふ事になる」と述べる。^(注16)この説を修正発展させたのが、樋口説(『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』であつて、「道芝」は飛鳥井の姫君に相当する人物ではなく、「夜の寢覚」の用例を二例をあげ、「道芝」は道案内・恋の取り持ち役の意であるとし、仲介者たる乳母の存在であるとす。

右にみるように、諸注見解のわかれるところ。確信を持って支持するだけの根拠があるわけではないが、(4)説には興味を引かれる。ただし石川説は、「狭衣」では飛鳥井の姫君を「道芝」と呼んでいるところから、飛鳥井の姫君と考えたのは理解できるが、「無名草子」に即して考えると、飛鳥井の姫君が「憎し」とされるのは、得心のゆかないところ。樋口説のように、「道芝」に道を案内する者、取り持ち役の意があるのは動かない。だが、「狭衣」における「みちしば」の用例は、道ばたに生えている芝草のようなとるにたりない存在の意で用いており、取り持ち役の意とは異なるという欠点がある。したがつて、「みちしば」から「狭衣」に戻し、そこから飛鳥井の姫君の乳母のような存在がいたか、とするのは弱点であるように思われる。

ところで、『うつほ物語』俊蔭巻において、兼雅が俊蔭の女との別れの場面で、「ふたしへに、いとほしく、あはれなることを思ひ入りて」すなわち父と女君との間で引き裂かれつつ

葉末こそあきをも知らぬ根を深みそれ道芝のいつか忘れむと詠んでいることに注目される。^(注17)「葉末は色づき、秋が来たこと

が知られるように、あなたは飽きられたかもしれませんが、根が深い道芝のように、深い愛情をもっている私は忘れることなくまた通つてきます」の意。室城秀之氏は「道芝」は、道ばたに生えている芝草のことで、道案内となる物の意も響かせ、必ずふたたび通つてきますの意を込める」と注する。^(注18)『うつほ』には「葺開・中」にも「昨日、御前にて、かくしたりしこそ、道芝なかりしか」という用例があり、これも道案内をするものの意で用いられている。

いったい「道芝」が兼雅と俊蔭の女との出会い場面に出くすることは興味深い。既に示唆したように親の介入による恋の蹉跎が想定される「玉藻に遊ぶ」と類似するからである。若小君(兼雅)が関白の賀茂詣での帰途紛れ込んだ、今は荒れはてた俊蔭の京極の邸宅は「蓬・葺の中より秋の花はつかに咲き出でて、池広きに、月面白く映れり」と描写されていた。蓬の宮は、俊蔭の女のような困窮の生活を送っていたとおぼしい。玉藻に遊ぶの「道芝」は、蓬の宮の困窮の象徴でありかつ二人を結びつけるような役を果たした存在だったのでなからうか。

以上、状況証拠ばかりであるから、「みこしば」は「みちしば」の誤写と断定するにはいたらないが、この箇所は、蓬の宮の出自や境遇に加えて、あるいはそれに連動するものとして、お話にもならないような「みこしば(みちしば)、法の師などの活躍まで意にそまない」と評しているのだとその大筋を理解したい。すなわち「無名草子」の「玉藻に遊ぶ」の評では、「蓬の宮」

に焦点をあて、その出自の設定や境遇、おそらく男主人公との出合いの過程で活躍する卑しい人々、さらに男君の父大殿の手によつて尚侍として入内するものの、宮中をさまよい出て、出家してしまうその人物像に対する不満を述べたるところに多くの紙面が割かれているということになる。

蓬の宮の運命③ 話をもとにもどす。蓬の宮の運命について、資料に即して、さらに確認してゆこう。

【資料C②】

尚侍心にもあらずうち参り侍りける頃、たのみしことぞかなしきくれ竹のとかきてはべりけるを見て

一〇二一 呉竹のよよにたえじと思ひしをいかでむなしき
なかと成りけん

ないしのかみさまかへて侍りける後、雪のあしたにつかはさせ給ひける

四二九 哀とは思ひおこせよかたしきて身もさえわたる
雪のよなよな

資料C②から、蓬の宮が尚侍として、宮中に入ったことが知られる。それがのちの朱雀院のものであることは、資料C③から確認される。

蓬の宮の入内は「心にもあらず」とあるように彼女の意思に

よるものではなかった。男は「たのみしことぞかなしきくれ竹の」と書かれた歌を発見する。「くれ竹の」は「世」「夜」「節から」伏し」などにかかるが、新古今集時代までの用例の圧倒的に多くは「よ」にかかるものである。ここでも男が「呉竹の

よよに」と応じているところから見ても「いつまでも一緒にいたいと頼みに思つてまいりましたが、いまはそのこともかなわなくなつて悲しい気持ちです」という歌意になる。それをみて男は、「私もあなたと同じように、絶える仲とはなるまいと思つておりましたのに、どうしてはかない仲となつてしまつたのか」と詠む。「かきておくりける」ではなく「かきてはべりける」とするところからみて、残された女の歌をみて、男が独白的に詠んだ歌であろうか。

さて資料C③からは、尚侍はいつの時点でか、出家をしたことがわかる。既に検討したように、「無名草子」の「ひろめき出づ」は、宮中からさまよい出ること考えられるから、宮中を出た彼女は出家をしたものと思われる。その後、行方を知つた帝から、雪の朝に贈られたのがこの歌とみる。帝は「私のことをかわいそうにと思つてみて下さい。こんなひとり寝の身も冷たく凍りつくばかり雪の夜な夜なは」と詠んでおり、尚侍になお未練をいだいているように思われる。ここには、尚侍をばさんで帝ともうひとりの男との三角関係があつて、進退きわまつた尚侍が、宮中を抜け出て、出家したというような事情を想定するのが自然であろう。とすれば、もうひとりの男とは男

主人公とみてよいように思う。^(注20)

このほかに男君と尚侍の關係を直接指示するものはないが、「人」(三四二)、「女」(九〇九)、「のちのあふせをたのめ侍りける女」(九六四)の存在が知られる。このうち九六四は、春宮の母女御とよばれるひとらしいので、後に検討するとして、三四二、九〇九の相手が尚侍である可能性の有無について、検討しておきたい。

【資料C④】

風あらくふきけるあした、人につかはしける

玉もにあそぶ関白

三四二 ふきはらふ風にみだるる白露も物思ふ袖に似たるけふかな

風が強く吹いた翌朝、おくられた歌。「風に吹かれてはらはらと白露が乱れ落ちる。あれは、まるであなたに会えず物思う私の袖に流れ落ちる涙さながらです。」の意。季節は秋。ふたりが契りを交わす以前の歌か、あるいはふたりの隔てる障害のため逢えない嘆きを歌ったものか、よくわからないが、尚侍となる女君におくられた歌の可能性がある。

【資料C⑤】

しのびて女にももの申してあしたにつかはしける

玉もにあそぶ関白

九〇九 ときやせしむすびやしけん下紐のみだれてこふるけさのわびしさ

資料C⑤は、後朝の歌か。とすれば、女君(蓬の宮)とのあいだには、資料C①(九八六)に掲出した歌が、後朝の歌と解釈されるので、相手は、この女君とは別の女と解した方がよい。「この下紐は解いたものか、結んだものか。乱れた下紐のように、けさはあなたを思つて、心乱れているのです。」の意。これらのほかには、その後の尚侍の運命をうかがせる直接的な資料はない。

四 一条院の女一の宮・冷泉院の一品宮との關係

一条院の女一の宮との關係 さて、視点を男君の側にもどす。次に「一条院の女一のみこ」との關係に注目してみよう。

【資料C⑥】

一条院の女一のみこに、しのびつつきこえ侍りけるを、いまはさしもあらじと思ひなりて

たまもにあそぶ関白

八〇九 下もえに身をのみこがす我が恋のけぶりやけふは空にみちぬる

おほむかへし

一条院の御うた

八一〇 したにたく思ひはたえじ雲の上に立ちのぼりぬる煙なりとも

男は、一条院の女一の宮に、人目につかないようにひそかにお手紙を差し上げていたが、いまは隠しておくこともあるまい

と考へ、「これまで心中ひそかに恋い焦がれておりましたが、私の恋の煙は、今日は空に満ち満ちてしまつたのでしようか。とうとう知られてもしかたがないほどになつてしまいました。」の意。

それに対して、一条院がかわつて、「いやいやあなたの下燃えの思いが絶えることはあるまいと思つています。たとえ煙が雲のうえにまで立ち昇るほどであつたとしても」と答える。「雲の上に立ちのぼりぬる」とは、帝の娘に思いをかけること、あるいは帝の耳に達する意を掛けていよう。

要するに、一条院の歌はどういう意味を伝達しようとしてゐるのか。

これについては、誰に對する「したにたく思ひ」であるかによつて二様の解釈がありうるように思う。

(1) 「したにたく思ひ」とは〈他の女〉に對する思いである。

とすれば、帝の娘あるいは上聞に達するほどの思いであつても、他の女に對する恋心が絶えることはあるまいと、男の誠意を疑うところに含意があることになる。

(2) 「したにたく思ひ」とは〈女一の宮〉に對する思いである。とすれば、男がこれまで内々に恋歌をおくつていたのが露頭もしくは公表する状況に立ち至つて、それを聞いた帝が思いは雲のうえまで昇つても、わが宮への思いは絶えることなくいつまでも愛情を持ちつづけてほしいと願う祝意をこめた歌と理解される。

いま、これを『風葉集』の詞書表現や配列から妥当性をさぐつてみることにする。

まず配列に注目すると、八〇九は、ふすぶる恋心を煙にたとえる和歌群に属するもので、八〇五・八〇六はともに狭衣が源氏の宮におくつた歌。八〇七は、『うつほ物語』「藤原の君」巻で実忠が貴宮におくつた歌。八〇八は『みかきがはら』の帝の歌で、詞書には「中宮、一品宮と申しけるときに、いでさせ給ひつるに、しのびて聞えさせ給ひける」とあつて、続いて本八〇九が出てくる。したがつて詞書の「しのびつきこえ侍りける」という表現は、男がひそかに恋歌をおくりつづけていたことであつて、ひそかに通つていたということを意味するわけではない。その限りでは、もはや隠している必要がなくなつた段階でおくつた歌に對して、帝からの返歌があつたということになる。

また、八一一をみると、『みかきがはら』の内大臣が、妹の中宮(後のか)のもとにおくつてきた右大将の歌に對する「消えぬべきこれは思ひのけぶりともかひなき空にほのめかせとや」というもどきの返歌になつてゐる。配列における主題の変奏を考慮すると、八一〇の一条院の歌も、単純な祝意をこめた歌とはうけとれなくなつてくるようだ。「したにたく思ひ」は、心中ひそかに思う他の女への恋心を意味するのが適切であつて、一条院は、男が女一の宮をいぢらずに愛してくれることに不安をいだいてゐると判断できるように思う。(1)の解に従いたい。

では、帝は誰に對する「したにたく思ひ」を危惧していたのか。もとより不明とすべきだが、あるいは蓬の宮の存在がここから炙りだされて来はしないか。

他にC⑥から考えることがらとして、次のような二点がある。

第一に、権大納言と關係のあつた前項の尚侍が入内したのが朱雀院であり、権大納言と一条院の皇女である女一の宮との關係がわかるわけであるから、一条院は朱雀院に先立つ帝であると判断できる。

第二に、資料C⑤にもどつて、その詞書に「しのびて」とあるので、C⑤は女一の宮に贈られたものかと考えることも可能だが、この歌の「しのびつきこえ侍りけるを」は、既に述べたように、忍んで通つていたというのではなく、忍んで恋歌を贈つていたが、帝の認知するところとなつて、隠す必要がなくなつたということであるらしいので、C⑤の相手は、女一の宮と考えないほうがよいということになる。

一条院とその周辺 さらにこの一条院とその周辺についての情報を集めて検討しておく。

【資料C⑦】

一条院かくれさせ給へりけるに、冷泉院の一品宮とぶらひ給へりければ

六二三 ありとてや人のとふらん消えはてし露もとまれ

玉もにあそぶの一条院女一宮

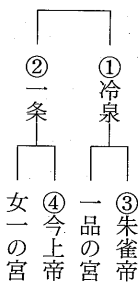
る草のはらかは

物語の途中で、一条院は崩御するらしい。その際、冷泉院の一品宮が一条院の女一の宮におくつた弔問歌が右の資料C⑦である。物語では、今上帝の存在が想定されるから、

冷泉—一条—朱雀—今上

の四代が親子關係で繋がつていたとは考えにくい。

冷泉と一条とは同世代で、おそらく兄弟なのではないか。また朱雀と今上とは、男主人公が兩帝の妃との交渉關係（今上帝の帝妃との關係については後述）が想定されるところからみて、世代的に重なるとみてよいのではないか。また一条から朱雀へと帝位が譲られたようにみられるので、次のような系図關係を想定することができる。



すなわち、一品の宮と女一の宮は従姉妹關係になる。

答歌は「私が生き残つておると思つてご申聞くださったのでしようが、私はすっかり消え入つております。露さえもとどまらない墓場（草の原）さながらとなつております。」というもので、一条院の鐘愛と、それゆえの女一の宮の深い嘆き、それを吐露できる一品の宮との近しい關係を読み取ることができる。

男君は、ひそかに女一の宮に歌をおくりつづけていたが、やがてそれは一条院の知るところとなつた。だが、それは幸せな結婚に繋がらなかつたらしい。一条院の死に際して、宮は生きる意欲ももうしない、「草の原(墓場)」さながらであると思つている。男君の暖かな庇護のもとにあつたとはイメージしにくい。

物語が、蓬の宮との出会いから始まつていたとするなら、男君の女一の宮への求愛は、どのような関わりをもつていたか。

蓬の宮の側からいえば、女一の宮との結婚話は、蓬の宮との仲の障害になつたにちがいない。そのために蓬の宮は追われ、後に尚侍として出仕することになるのではないか。その離反のための画策をはかつたのは男君の父だつたのであろう。これは『うつほ物語』の俊蔭巻とへしのびね型』の物語展開を繋げたときにみえてくる想定であつた。

また女一の宮の側からいえば、男君の他の女への恋心、特になんらかのかたちで蓬の宮の存在が障害となり、男君は女一の宮と結婚するにいたらないらしい。男君はその後も思慕の念を持ちつづけたろうが、女一の宮は失意のうちに、頼るべき父院をもうしない孤独な境涯に終わるのである。

かくして男君は、蓬の宮も女一の宮ももうしなうということになるのではあるまいか。

だが、細部を煮詰めてみると、なお問題も残るようである。男君と女一の宮との関係が公になつたとき、一条院の歌に「雲の上に立ちのぼりぬる」とあつたように、院はまだ帝位にあつ

たであらう。当帝の内親王との結婚を実現するために世間からは忘れ去られた蓬の宮との関係の清算をはかろうとしたのが父であつたかと考えてみたわけだが、蓬の宮が尚侍として入内したのは、朱雀院のものであつた。とすれば、ここに一条朝から朱雀朝への御代がわりを、すなわちある程度の時間経過を想定する必要がある。それがどのように語られていたか、経緯の詳細については不明といわざるをえないことになる。

冷泉院一品の宮との関係 ところで、冷泉院の一品の宮については、次のような情報が知られる。

【資料C⑧】

冷泉院のおほきさいかくれさせ給ひて、一品宮のくろききぬにやつれ給ひけるを見て、おとも聞えさすべきもなきに、かぎり有りけるこそとて

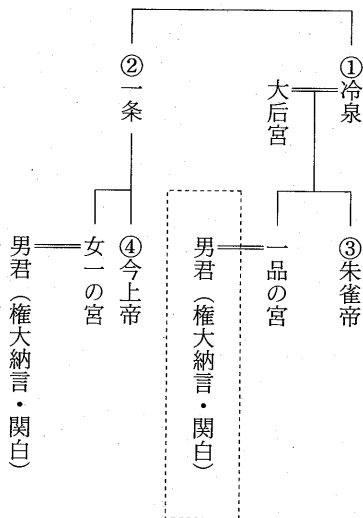
六六九 かきくらしおつる涙のふち衣きる人わける色ぞかなしき

冷泉院の太后亡きあと、服喪中の一品の宮に閑白がおくつた歌。「おとも聞えさすべきもなきに、かぎり有りけるこそとて」とは、弔問のしようもなく、悲しみをあらわそうにも限りがあることなのでしたの意か。「おとも聞えさすべきもなきに」に弔問しようにもかなわぬ事情があつたと推測される。

歌は「暗澹たる思いに落ちる血涙に、あなたのように藤衣の喪服を着て悲しみを共有することもできず、赤く染まつた衣の

色をみながら過ごすのは悲しいことです。」の意。

冷泉院の太后の死に際して、濃い色の喪服を着ることもできず悲しみの血涙で衣を赤く染めているところを増幅すれば、太后と関白の間の秘められた関係があったか、と想像されるが、そのような秘められた関係を前提にした歌を娘の一品の宮におくるといふのは不審というべきだろう。むしろ一品の宮との間に世間には認知されない秘められた関係があつて、太后の死をともに悲しむことのできないことをこのように表現したか。世代的にも一品の宮との関係によるものとみるのがよいように思う。確言しがないところが残るが、このように推測しておきたい。あらためて、系図を掲出すれば、次のようになる。



五 春宮の母女御との関係

春宮の母女御との関係 さらに男君には、春宮の母女御とよばれる女性との関係がある。

【資料C⑨】

内にまゐらんとし侍りけるのちのあふせをさま
 さまにちぎりて、いはほにおふるまつほどはと
 申しける人のかへしに おなじ春宮のはは女御
 一〇二契りきと我はわすれず思ふともいはほにおふる
 まつ人もあらじ

【資料B④】

また、「いはほ嚴に生ふるまつ人もあらじ」と言へる女御ぞ、さる
 方にてかからぬ」など言へば、

【資料C⑩】

のちのあふせをたのめ侍りける女の、ほかさま
 に成りにける夜つかはしける

たまもにあそぶ関白

九六四 けふまでもながらへましや忘れじといひしにか
 かる命ならずは

資料C⑨は、宮中に入内した後の逢瀬をさまざまに約束して「嚴に生える松ではないが、逢瀬の時を待つまでの気持ちはどんなにつらいことか」という男に言葉に「春宮の母女御」が、「あなたとお約束したことは、私は決して忘れはいたしません。で

も私が思っていたとしても、あなたはずつと待つていてくださるかしら」と答えたという。資料B④は、まさしくこの贈答の一節を引いたこの女御評にあたるもの。「さる方にてかからぬ」というのは、「物語にとりて、主としたる身のありさまは、いとうたてありかし」(B③)を受けるもの。すなわち、女主人公とも目すべき蓬の宮について好感をもてないという論評をうけたもので、逆にそんなには嫌ではないということであろう。

さらに、資料C⑩も、知られる限りの存在のなかでは、この女御についての情報とみるのがもつとも適切と考えられる。後の蓬瀬を約束した女が、ほかの男のもとに去つてゆくことになった。その夜、関白(男主人公)がおくつた歌。「今日まで生きてこられたのは、あなたのことは忘れせんわとおっしゃった言葉をもとにきたからなのです。でもこれからは何を頼みに生きていったらよいか」という。

C⑨の男は明示されていないが、『無名草子』に蓬の宮と対比して論評され、C⑩との対応も考慮するならば、春宮の母女御と男君との間には、入内以前に深い関係にあったことになる。どのような事情があつたかはわからないが、それは世間に公認されるような間柄ではなかつたらしい。さればこそ女は入内することになる。男は、女に今も愛情を残しているし、女の方でも男に未練を残している。しかし、彼女は愛情は愛情として、報われたいものであることを知つていようである。C⑨の「思ふともいはほにおふるまつ人もあらじ」という一節には、そ

うしたみきわめがはたらいっているように理解される。樋口氏が『無名草子』の論評に対して、「まつ人もあらじ」の恨みの言葉を残して入内する意志的な母女御に、さわやかさをおぼえているのかもしれない。」と述べるのは、行き届いた理解であると思われる。

ところで、この春宮の母女御は、どの帝の女御か。この女御の子である春宮には、次のような歌が残されている。

【資料C⑩】

女にたまはせける 玉もにあそぶの春宮

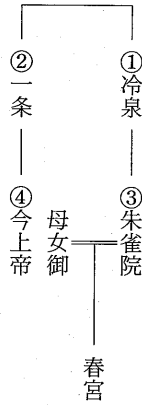
一一三秋ふかきをぎの上吹く風のおとのそよなかか
る物思ふらん

春宮が女におくつた恋歌。「秋深きいま、荻の葉を風がそよと音をたてて吹いている。そうだ。どうしてこんなに物思いをするのだろうか。みんなあなたゆえなのです。」の意。

この歌からすれば、春宮は恋歌をおくるほどに成人していることになる。「冷泉院」「一条院」「朱雀院」がいずれも院号で表記されているところからすれば、今上帝の存在が想定される。

この今上帝の女御であるとすれば、『玉藻に遊ぶ』では、冷泉院・一条院の第一世代、朱雀院・今上帝の第二世代のほかに、春宮の第三世代までえがかれていたことになる。男主人公は第二世代に属するとみられるので、松尾聰氏が「春宮を今上の皇子とみる場合、春宮をのぞいては、他に春宮と同時代と目すべき目ぼしい人物を全くみ出し得ないことからみて、S(資料C⑩)

をさす)の事件だけがどうやら特別に、年立からはみ出してゐるやうな感じを与えるのは不審である」と指摘するような問題が出てくる。さらに今上帝までは、冷泉皇統と一条皇統とが交互に帝位につくかたちになっているが、今上帝の代にいたって、一条皇統が続くことになる。こうした問題を緩和するには、春宮が朱雀帝の皇子であること、すなわち「春宮の母女御」は「朱雀院女御」であつたかとする説を支持しておきたい。



とすると、男主人公は、蓬の宮も、この女御も、朱雀帝に奪われたことになる。さらに、一条院の女一の宮との仲は、不幸におわり、冷泉院の一品の宮との関係も世間には認められがたいものであつた。

とすれば、玉藻に遊ぶという題号によつて象徴されるところの男主人公の「いとなきこひ」とは、このような蓬の宮・春宮の母女御・女一の宮・一品の宮らとの、いずれも思うにまかせぬ不幸な恋の連続と嘆きをテーマとするものであり、その一方で、彼は閑白の地位にまで出世するので、恋と栄達との乖離もまた目につくといえようか。

その他の資料 最後に、残された資料にもふれておく。

【資料C⑫】

七七四 いはかきやぬまのみごもりもしわび心づから
やくだけはてなん

左衛門督の独自の恋歌。私の心は水が流れ出ることのない岩垣沼のようなもの。あなたへの思いは水の中に秘めて漏らすこともできないまま、自らのせいとはいへ、わが恋心はこなごなに砕けてしまふのか。」の意。

左衛門督の恋は誰に対するものか。彼が系図上、どこに位置づけうるか、不明である。

六 復原の試み

『玉藻に遊ぶ』の復原と主題 『玉藻に遊ぶ』という物語は、平安末から鎌倉初頭にかけての時代、かなり高い評価を得ていた物語であつたといえる。資料から推定されるこの物語の断片的内容についてはこれまで検討したとおりであるが、いささか復顔術をほどこし、ひとつの可能性としてその輪郭を整理すれば、次のようにならうか。

この物語は、「親はありくとさいなめど」という催馬楽「何為」の引用によつて始まる。まだ定まった妻をもたない権中納言は、親の心配をよそに、月に誘われての夜歩きにより、今は落魄の生活を送る蓬の宮の存在を知り、やがて契りかわすことになる。

一方、男君は、ひそかに一条帝の鐘愛する姫宮である女一の

宮に歌をおくっていたが、それを知った退位間近い帝は、権中納言の多情を案じる。そのためか結婚話は思うように進まない。そこに蓬の宮の存在が障害としてあること知った権中納言の父大臣は、権中納言との仲を裂こうと画策する。やがて一条朝から朱雀朝に御代がわりがあり、蓬の宮は父大臣の後見というかたちで尚侍として入内することになる。だが、彼女はおそらく朱雀帝と男君との板挟みにあつて進退きわまり、ついに宮中を出奔し、出家をする。

また男君は、後に春宮の母女御とよばれる女性とも深い関係にあつた。おそらく男の優柔不断な態度によつて、これまた世間から認知される結婚にはいたらず、女は朱雀帝に女御として入内することになる。後の蓬瀬を約束する男に女もまた心惹かれながらも去つてゆく。やがて彼女は皇子を生み、春宮の母となる。

結局、男君は、朱雀帝に蓬の宮、ついで春宮の母女御と奪われ、女一の宮への愛もかなわず、また冷泉院の一品の宮とも忍ぶ関係にあつたらしいが、閑白として栄達しながらも、不如意の人生を送るのだった。

〈玉藻に遊ぶ〉という題号は、「いとなきこひ」すなわち絶えない恋の苦悩を暗示するとともに、華やかな外貌と内面の苦悩の対比が託されているのであつた。蓬の宮・女一の宮・一品の宮・春宮の母女御といった女性たちと思うにまかせぬ恋をえがくところにこの物語の主眼があつたが、このような主人公の

色好み性の蹉跌あるいは変容は、この物語を生み出した基盤と深い関係があつたと考えられるとともに、物語史の変貌を示すものでもあつたのである。^(注2)

注

- (1) 『大日本史料』第五編之八(天福元年是春の条)によつて一覽できる。
- (2) 『大日本史料』第五編之八に掲出された本文による。小文字は割注の部分であることを示す。
- (3) 樋口芳麻呂「物語二百番歌合」と『風葉和歌集』(上)―『源氏物語』作中人物の和歌を中心に―(『文学』一九八四・五)によれば、後百番歌合を建久六年(一九五・六)頃の成立という。
- (4) 田村悦子「蜻蛉日記絵の詞書断簡について」『美術研究』第二四一号 昭和41・3
- (5) 松尾聡「玉藻に遊ぶ権中納言の物語」『平安時代物語の研究』(東寶書房 昭和30・6)、樋口芳麻呂「玉藻に遊ぶ権中納言」物語。平安鎌倉時代散逸物語の研究(ひたたく書房 昭和57・2)。特に断らないかぎり、両氏の説はこれらの論考による。諸氏の論考には、堀部正二『中古日本文学の研究』(教育図書株式会社 昭和18・1)、萩合朴『平安朝歌合大成』四(同朋舎 一九七九・八復刊)、三谷栄一・関根慶子『日本古典文学大系』狭衣物語(岩波書店 昭和40・8)、松村博司・石川徹『日本古典全書』狭衣物語上下(朝日新聞社 昭和40・7 昭和42・12)、三谷栄一『物語史の研究』(有精堂 昭和42・7)、小木喬『散逸物語の研究』平安・鎌倉時代編(笠間書院 昭和48・2)、鈴木一雄『堤中納言物語序説』(桜楓社 昭和55・9)、久下晴康(裕利)『平安後期物語の研究』狭衣・浜松(新典社 昭和59・12)ほかがある。
- (6) 本歌は「古今和歌六帖」(第三ノにほ／一五〇四)にも載り、『源氏物語』「若菜上」巻にも「玉藻に遊ぶ鶯の声々など」と「鳩」を「鶯鶯」に書きかえて利用されている。

(7) 本歌の解釈には、一夜説と月来説とよばれる解釈の相違がある。月来説は、あなたの訪れをすつと待ちつづけて、長月のそれも下旬、有明の月の出るまでになってしまいましたというもので、定家の解釈として知られる(『顕注密勘』)。しかし、契沖が「百人一改観抄」で明らかにしたように、「古今集」の配列からすれば、あなたの言葉を感じて夜の長い長月の夜を待っていましたら、有明の月の出るまでになってしまいましたという一夜説による解釈が適切であつて、本冒頭もそうした理解にもとづく引用とみられる。

(8) 以下「無名草子」の引用は、久保木哲夫校注・訳 完訳日本の古典「堤中納言物語・無名草子」による。なお「さいなめど」とある箇所は、底本(天理図書館蔵「無名物語」)の「さいなめど」を意改したものである。

(9) 鈴木一雄「神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集」(小学館 日本古典文学全集「神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集」(小学館 昭和51・3)の白田基五郎訳による。

(10) 鈴木一雄 六条斎院家物語合の作者たち 前掲書。
(11) 樋口氏も「まだ権中納言時代の恋を描いた」と慎重な言い回しをしており、短編として提出されたと主張しているわけではない。

(12) 正宗教大編「類聚名義抄」(風間書房 昭和50・5)による。
(13) 「新撰字鏡(増訂版)」(臨川書店 昭和48・12)による。
(14) 中田祝夫・根上剛士「中世古辞書四種 研究並びに総合索引」(風間書房 昭和46・7)による。

(15) 「校注夜半の寝覚」(武蔵野書院 昭和56・10)の補注(七二)にも、同内容のことが述べられている。

(16) 本歌の存在は、長南有子氏にご示教を得たものである。
(17) 室城秀之「うほ物語」(桜楓社 平成7・10)

(18) 「和歌大辞典」(明治書院 昭和61・3)所載の「くれたけの」の条(滝沢貞夫執筆)によれば、「よ」にかかるとの73例、「ふし」にかかるとの28例、「暮れ行く」にかかるとの1例という。

(19) 出家したことが明らかであるにもかかわらず「風葉集」における最終呼称が「尚侍」であるのは、①出家以後は目立った活躍することがなかったか、②遺俗したか、の理由によるだろうが、ここでは穏当

に①の理由によると考えておく。
(21) 松尾説・樋口説ともにこの立場での解釈である。松尾説は「雲居ま

で立ちのぼった烟であつても、内心にたく恋の思ひはやはり絶えないのだから——雲居なる女一の宮に恋心をもつて居るにしても、内心なほひそかに他の女たちに分ける思ひは絶えないのだから」と解き、樋口説も「女一宮と結婚しても、浮気なあなたの心労は絶えまいというのであろうから、権大納言が他の女性にも懸想している——たとえば(5)B(本論ではC⑧)の冷泉院一品宮などにも言い寄っていたのではあるまいか——のを知って、一条院は女一宮との結婚に不快感を示すようになつていたのではないかと思われる。」と解く。

(22) 本物語の系図については、狭衣物語の系図と積極的に重ねることによつて作成したという樋口氏のものがある。本論では、あくまで残された資料の側からどう作成されるかという立場から系図化を試みたものであるが、結果からすると、春宮の母女御を今上帝の妃とするなどの小異はあるものの、基本的な点で樋口氏の作成した系図と一致してくる。

(23) この点については、神野藤昭夫「斎院文化圏と物語——平安女流文学のもうひとつの基盤——」(『日本学研究』4 北京日本学中心 一九九五・九)で論じた。
*本論文は、平成七年度跡見学園女子大学特別研究助成費による研究成果の一部である。